

教 育 研 究 業 績

2022年 5 月 1 日

氏名 近 藤 清 華
学位 修士 (教育学)

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
家庭科教育学	家庭科 教員養成 カリキュラム	
主要担当授業科目	家庭、家庭科指導法、食物環境Ⅰ・Ⅱ、ジェンダー論B、課題研究A・B 子ども学基礎演習A・B、子ども研究法A・B、教育実習指導、教育実習Ⅲ	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
<p>1 教育方法の実践例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学における通信教育課程の指導の実践「初等家庭科教育法」 ・大学における通信教育課程の短期スクーリングの指導実践「家庭」 ・小学校家庭科教員に必要とされる知識・技術を身につけるための授業の実践「家庭」の指導 ・小学校家庭科教員に必要とされる教科指導技術を身につけるための授業の実践「教科指導法(家庭)」の指導 	<p>平成 21 年 4 月～平成 22 年 7 月</p> <p>平成 21 年 8 月～</p> <p>平成 20 年 9 月～現在</p> <p>平成 20 年 4 月～現在</p>	<p>東京未来大学子ども心理学部通信教育課程の「初等家庭科教育法」(3年次配当、半期、小学校教員免許取得必修、2単位)の授業において、オリジナルの学習の手引きを作成した。授業形態はメールのみであったが、レポート課題等で授業内容の理解を高め、レポートによる課題にて評価を行った。</p> <p>東京未来大学子ども心理学部通信教育課程の「初等家庭科教育法」(3年次配当、半期、小学校教員免許取得選択科目、2単位、スクーリング講座)の授業において、オリジナルのプリントを用いて理解を深められるよう努力した。実習として調理実習、被服製作を行った。</p> <p>国士舘大学文学部教育学科初等教育専攻の「家庭科概論」の授業において(2年次配当、後期、小学校教員免許取得科目、2単位、平成20年度～平成23年度) 川口短期大学こども学科の「家庭」(2年次配当、前期、小学校教員免許取得選択科目、2単位、平成24年度～令和元年度) 共立女子大学家政学部児童学科の「家庭科指導法」(2年次配当、後期、小学校教員免許取得選択科目、2単位、平成27年度～現在) 東京成徳大学子ども学部子ども学科の「家庭」(3年次配当、後期、教員免許取得選択科目、2単位、令和2年度～現在) 家庭科とはどのような学問か、さらに、学習指導要領の分析、学習指導案の作成、模擬授業等を通して、小学校の教員として家庭科を指導する際に必要な知識、技術の習得を目指し、指導を行った。授業に際しては、理解を定着させるため、オリジナルのプリントを用いた。家庭科の教科内容等についてのオリジナルプリントを作成した。さらに、調理実習や被服製作等、知識のみならず技術の習得もできるようにしたため、知識と技術の定着ができた。</p> <p>国士舘大学文学部教育学科初等教育専攻「教科教育法(家庭)」(3年次配当、前期、小学校教員免許取得科目、2単位、平成20年度～平成23年度) 川口短期大学こども学科「初等教科教育法(家庭)」(2年次配当、後期、小学校教員免許取得選択科目、2単位)(平成24年度～令和元年度) 東京成徳大学子ども学部子ども学科の「家庭科指導法」(3年次配当、前期、小学校教員免許取得科目、2単位、令和2年度～現在) 家庭科の教科内容等についてのオリジナルプリントを作成した。学習指導要領の分析シートを作成し、グループワークなどができるよう考慮した。知識と技術の定着ができ、指導案の作成、模擬授業等につながられた。 授業において、学生が知識を定着できるように、毎回、資料を作成し配布している。授業に際しては、振り返りがしやすいようにオリジナルのプリントを用いた。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・家庭科授業の中の被服製作の技術を身につける実践 ・保育者に必要な栄養に関する知識・技術を身につける実践 「子どもの食と栄養Ⅰ・Ⅱ」の指導 ・中学・高等学校家庭科教員に必要とされる教科内容の知識・技術を身につけ、指導技術を身につけるための授業の実践 「家庭科教育の理論と方法」、「家庭科教育の理論と実践」の指導 ・一般教養科目「食物環境Ⅰ・Ⅱ」の指導 ・一般教養科目「ジェンダー論B」の指導 	<p>平成 24 年 4 月～ 平成 24 年 8 月</p> <p>平成 24 年 4 月～ 令和 2 年 3 月</p> <p>平成 29 年 4 月～ 平成 30 年 3 月</p> <p>令和 2 年 4 月～ 現在</p> <p>令和 2 年 4 月～ 現在</p>	<p>国士舘大学文学部教育学科初等教育専攻の「家庭科実習 A」（3 年次配当、前期、小学校教員免許状取得選択科目、2 単位、平成 20 年度～平成 23 年度）の授業において、学生の要望を考慮し、被服製作を中心に実習を行った。平成 20 年度より、小学校家庭科で指導する内容を含め、バッグやワンピースの製作の指導を行った。</p> <p>川口短期大学こども学科の「子どもの食と栄養Ⅰ」（1 年次配当、前期、保育士資格必修科目）、「子どもの食と栄養Ⅱ」（平成 26 年度までは 1 年次配当、後期、保育士資格必修科目、平成 27 年度より 2 年次配当、後期、保育士資格必修科目）において、テキストに沿ったオリジナルワークシート（全時間分作成）を作成し、補助教材とした。</p> <p>共立女子大学家政学部被服学科、食物学科の「家庭科教育の理論と方法」（3 年次前期配当、2 単位、中学高等学校家庭科教員免許状必修科目）、「家庭科教育の理論と実践」（3 年次後期配当、2 単位、中学高等学校家庭科教員免許状必修科目） 家庭科の教科内容等についてのオリジナルプリントを作成した。家庭科のバックグラウンドとなる家政学の概念に触れながら、家庭科教育の衣食住、家庭生活と家族、消費者教育、保育、高齢者と福祉に関する内容の理解に加え、学習指導要領の分析、グループワークなどを組み入れ、知識と技術の定着をし、指導案の作成、模擬授業等につなげた。</p> <p>東京成徳大学子ども学部子ども学科の「食物環境Ⅰ」（2 年次前期配当、2 単位、一般教養・選択科目）、「食物環境Ⅱ」（2 年次後期配当、2 単位、一般教養・選択科目） 食生活に関する内容においてオリジナルプリントを作成した。毎回の授業を振り返り、各自の課題を明らかにし、健康で豊かな食生活と安全な食物環境に対する認識を深める授業を行い、生涯にわたり健全な食生活の実践のための基本的考え方や方法を総合的に学ぶ授業を行った。</p> <p>東京成徳大学子ども学部子ども学科の「ジェンダー論 B」（2 年次後期配当、2 単位、一般教養・選択科目） ジェンダーにおける基礎的理解し、ジェンダー問題を主体的に理解し、自分なりの考えをまとめ理論化できる能力を養うよう毎回、資料を作成し配布している。授業に際しては、振り返りがしやすいようにオリジナルのプリントを用いた。</p>
<p>2 作成した教科書，教材</p> <p>授業教材の作成</p>	<p>平成 20 年 4 月～ 現在</p>	<p>担当授業において、授業内容に関するオリジナルのプリントを作成し、授業内容の理解につなげている。</p>
<p>3 教育上の能力に関する大学等の評価</p> <p>学生による授業評価アンケート 国士舘大学、東京未来大学、 川口短期大学、共立女子大学 東京成徳大学</p>	<p>平成 20 年 4 月～ 現在</p>	<p>国士舘大学、東京未来大学、川口短期大学、共立女子大学、東京成徳大学において授業後に実施された。 学生による授業アンケート結果は、5 段階評価であり毎回 4.5 以上の評価を受けている。特に「教員の話し方や説明が分かりやすかった」「毎回の授業のテーマの明確化されていた」等の評価が高い。</p>
<p>4 実務の経験を有する者についての特記事項</p>	<p>平成 28 年 8 月 平成 29 年 8 月</p>	<p>保育教諭資格付与特例講座として埼玉学園大学において、保育教諭資格付与講座の特例科目「保健と食と栄養」の「子どもの食と栄養」を担当した。本講座は、幼稚園教諭免許状を取得し、実務経験を 3 年以上有している者に、保育士資格を取得するための講座である。2 日間の集中講義を行い、栄養に関する基礎的知識、子どもの健康と食生活の意義、さらに調理を行い、子どもの発育、</p>

		発達と栄養、食生活との関連を発達ごとに講義、演習をした。		
5 その他		特記事項なし		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項	年月日	概要		
1 資格, 免許 中学校教諭一種免許状 (家庭) 高等学校教諭一種免許状 (家庭) 学校図書館司書教諭 中学校教諭専修免許状 (家庭) 高等学校教諭専修免許状 (家庭)	平成 13 年 平成 13 年 平成 13 年 平成 15 年 平成 15 年	東京都教育委員会 (平 13 中 1 第 13210 号) 東京都教育委員会 (平 13 高 1 第 13262 号) 文部省 (第 216111 号) 神奈川県教育委員会 (平 15 中専修第 0004 号) 神奈川県教育委員会 (平 15 高専修第 0003 号)		
2 特許等 ・大学における助手業務 ・専門学校における業務 ・短期大学における業務	平成 16 年 4 月～ 平成 17 年 3 月 平成 17 年 4 月～ 平成 19 年 3 月 平成 24 年 4 月～ 令和 2 年 3 月	共立女子大学家政学部教職課程研究室において、研究室の運営として主に、教授、助教授、講師の職務補佐等を行った。授業準備、学生への対応、教育実習に関する書類の作成等を行った。 貞静学園保育福祉専門学校の教諭として、教育実習、保育実習に関する書類の作成、実習園への依頼、実習指導としての実習園への巡回指導。学生募集として高等学校への訪問。担任としてのクラス運営、就職指導等を行った。 川口短期大学の専任講師、准教授として、保育実習、教育実習に関する実習の講義、実習園への依頼、実習指導としての実習園への巡回指導を行った。 ゼミを担当し、実習指導、就職指導など学生指導を行った。 校務分掌としては、キャリア委員、紀要委員、FD 委員、入試委員を担当した。		
4 その他 学会における活動 日本家庭科教育学会 会員 日本家政学会 会員 日本家政学会家政教育部会 日本家庭科教育学会 関東地区会 役員	平成 13 年 平成 13 年 平成 29 年 平成 27 年	正会員 正会員 選挙管理委員 (平成 29 年、平成 31 年) 役員 (会計) 令和元年 7 月まで		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1『家庭科における意思決定能力』	共著	平成 21 年 (2009 年) 2 月	家政教育社	p193-p204 担当 佐藤文子、角間陽子、俣倉朋美、山下梢、佐藤ゆかり Eric Keung、飯塚比奈子、那須智子、 <u>近藤清華</u> 、庄司佳子、布川和恵 第 12 章 家政学教育における意思決定—カリキュラムの視点から—大学における教員養成カリキュラムにおいて、高等学校家庭科教員がどのような意思決定のもとに、家庭科に関する知識・技術を身につけているかを把握し、大学教育への期待が多きいことが明らかになっている。特に、大学教育における地域社会、環境、福祉、高齢者の生活、消費生活に関する内容の充実が課題となっている。

				(全 240 ページ)
2 「初等家科教育法」 学習の手引き	単著	平成 21 年 (2009 年) 4 月	東京未来大学	東京未来大学通信教育課程の「初等家庭科教育法」(3 年次配当、小学校教員免許状取得必須、2 単位)において、家庭科の学習の手引を作成した。テキストを要約し、簡単な問題を作成している。テキストの学習を確実なものにできるため、知識の定着ができています。 (全 10 ページ)
(学術論文)				
1 『大学における家庭科教員養成カリキュラムの現状と課題(第 1 報)ー高等学校家庭科教員の教科内容・指導に関する認識・実態ー』 (査読付き論文)	共著	平成 16 年 (2004 年) 4 月	日本家庭科教育学会誌 47 巻 1 号 p3-p9	大学教育における家庭科教員養成課程に必要な内容を考察するため、現職高等学校家庭科教員の認識・実態の現状を質問紙調査によって調べた。その結果「知識・技術」において、得意であると考えている分野は食生活分野であり、得意ではないと考えているのは住生活分野であること、また、習得した機関としては大学の専門科目が多く、消費者教育や高齢者福祉に関するものは、研修や社会教育に期待していることが明らかとなった。 論文全般を担当、佐藤は指導。 近藤清華、佐藤文子 共著。
2 『大学における家庭科教員養成カリキュラムの現状と課題(第 2 報)ーシラバス分析からー』 (査読付き論文)	共著	平成 16 年 (2004 年) 4 月	日本家庭科教育学会誌 47 巻 1 号 p10-p16	大学教育における家庭科教員養成課程に必要な内容を考察するため、教員養成系学部と家政系学部のカリキュラムを調査・分析し、さらに、数人の講義担当者へのインタビューから、大学における教育内容において、高等学校家庭科教員が持つべき能力を網羅していない現状、即ち研究者の見解から、社会の動きをキャッチできる能力、人間として生きるためのライフスキルを習得する必要性があることを指摘した。 論文全般を担当、佐藤は指導。 近藤清華、佐藤文子 共著。
3 『保育士養成課程における科目「子どもの食と栄養」の現状と課題ー短期大学のシラバス分析から』	単著	平成 24 年 (2012 年) 12 月	川口短期大学 研究紀要, 第 26 号 p117-p128	保育士養成課程における修業科目の一つである「子どもの食と栄養」の内容が、保育士養成短期大学においてどのように授業展開されているのかを考察している。 具体的には、各短期大学における授業名称および開講科目の修得単位数、さらに、現在、保育士養成課程において使われているいくつかの教科書「子どもの食と栄養」を参考に、項目を設定し、その項目内容が短期大学の授業において行われているか、否かについて、分析・検討し、保育士養成課程に必要とされる内容を論述している。
4 『小学校教員養成科目としての家庭科の現状と課題ー短期大学のシラバス分析からー』	単著	平成 25 年 (2013 年) 12 月	川口短期大学 研究紀要, 第 27 号 p185-p194	小学校教員養成を行っている私立短期大学を対象に、小学校教科目である「教科に関する科目」として位置づけられている「家庭」、「教職に関する科目」として位置づけられている「家庭科教育法」の授業内容について考察している。具体的には家庭科の教科内容、学習指導要領を踏まえた学習内容、家庭科の指導方法について、各短期大学のシラバスから小学校教諭として家庭科を指導する際に必要な内容を知識・技術と

5『家庭科の学習内容の現状－短期大学生の学習経験から－』	単著	平成 26 年 (2014 年) 12 月	川 口 短 期 大 学 研 究 紀 要, 第 28 号 p137-p147	短期大学生を対象に、小学校、中学校、高等学校の家庭科での学習状況を把握し、各学校段階における家庭科の学習内容を分析、考察している。家庭科での学習内容は衣食住、家族、消費生活、保育、高齢者等、多岐にわたっていることから、高等学校卒業後に家庭科の学習内容を振り返り、学習内容がどのように定着をしているかを論述している。家庭科の学習内容として実践的・体験的な学習指導がされた項目において、学習の定着につながっていることが明らかとなっている。
6『家庭科における食領域に関する学習内容－小学校家庭科教科書の記述を通して－』	単著	平成 27 年 (2015 年) 12 月	川 口 短 期 大 学 研 究 紀 要, 第 29 号 p173-p188	家庭科の学習内容には必ず食に関する内容があり、家庭科教育の長い歴史の中で、系統的に学ばれている。家庭科の学習のスタートとされる小学校家庭科の食領域に関する学習を、小学校学習指導要領、小学校家庭科教科書、食に関する指導内容から考察している。小学校家庭科では、学習指導要領及び教科書を基に授業展開するが、児童の実態や社会状況を踏まえる必要があり、他教科との連携も必須であることを明らかにしている。
7『短期大学教育における「こども」へのアプローチ－学科名称を通して－』	単著	平成 28 年 (2016 年) 12 月	川 口 短 期 大 学 研 究 紀 要, 第 30 号 p181-p194	短期大学が児童やこどもにどのようなアプローチをしているのか、短期大学の学科名称から、短期大学がこどもについてどのような枠組みで学ばれているのかを考察している。さらに、短期大学の役割として、短期間ではあるが、教養及び専門の知識・技術の習得と、職業又は実生活に必要な能力の習得が求められていることから、保育士、幼稚園教諭二種免許状、小学校教諭二種免許状の資格、免許状取得の状況においても論述している。
8『家庭科の教科内容に関する考察－小学校学習指導要領から－』	単著	平成 29 年 (2017 年) 12 月	川 口 短 期 大 学 研 究 紀 要, 第 31 号 p123-p136	新学習指導要領から小学校家庭科の教科内容を考察し、今、求められている家庭科の在り方を整理するとともに、家庭科が一教科として、学校教育の中でどのような位置づけとなっているかを検討した。新学習指導要領の内容を整理し、さらに、日本家庭科教育学会が要望を出している授業時間数の確保について等をまとめた結果、家庭科教育に関わる教員の多くは、重要な教科であり、子どもに必要な力をつけさせるための内容を指導したいと考えている。今後は、限られた授業時間数の中での時間数の授業展開の在り方、児童に身につけさせるために必要とされる家庭科教員の資質・能力についても検討が必要であることを論述している。
9『「食育」に関する一考察－保育所保育指針から－』	単著	平成 30 年 (2018 年) 12 月	川 口 短 期 大 学 研 究 紀 要, 第 32 号 p105-p120	2017 年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼稚園連携型認定こども園教育・保育要領が同時に改訂・改定された。ここから、保育、教育のねらいや内容をできるだけ同一のものにするという動きがあり、保育、教育の連携が望まれていることが推察される。そこで、保育所保育指針に示された食

<p>10『大学における家庭科教員養成カリキュラムの課題～家庭科教員の認識・実態とシラバス分析を中心として～』</p>	<p>単著</p>	<p>令和元年 (2019) 7月20日</p>	<p>日本家庭科教育学会関東地区会誌 関東地区会 40周年記念 p23-p24</p>	<p>育の内容を整理するとともに、継続的に食育を学ぶために必要な、各学校段階の連携について、現状を整理することが重要であると考え、今求められている食育について整理した。その結果、保育者の立場から、食育を保育内容に取り入れ、計画する際にはかなりの知識が必要であることが分かった。さらに食物アレルギーへの対応、個々の子どもへの対応、保護者支援など今後の課題について論述している。</p>
<p>11『大学における家庭科教員養成カリキュラムの縦断的研究-高等学校家庭科教員の教科内容・指導の認識・実態の比較から-』 (査読付き論文)</p>	<p>単著</p>	<p>令和2年 (2020) 2月</p>	<p>日本家庭科教育学会誌 62巻4号 P230-p239</p>	<p>大学教育における家庭科教員養成課程に必要な内容を考察するため、現職高等学校家庭科教員の認識・実態の現状を質問紙調査によって調べ、2002年調査と2015年調査の比較を行った。その結果「知識・技術」において、得意であると考えている分野は食生活分野であり、得意ではないと考えているのは住生活分野であることから、2002年調査、2015年調査ともに同様の結果となった。2002年調査と比べ、2015年調査からは高等学校家庭科教員の指導の基礎的なものの多くは大学教育習得されていることが分かったが、「高齢者の生活と福祉」に関する内容においては、今後もより一層、大学での学びを深める必要があると考えられる。</p>
<p>12『家庭科における調理実習の内容と課題-小学校家庭科教科書における記載から-』</p>	<p>単著 単著</p>	<p>令和3年 (2021) 3月</p>	<p>東京成徳大学 子ども学部紀要 第11号 P1-p10</p>	<p>小学校家庭科の調理実習の題材と食材、調理例について学習指導要領の取り扱いから教科書の具体的内容を分析した。小学校家庭科の歴史的変遷からの調理実習の題材やとりあげられる食材をふまえ、2017(平成29)年告示「学習指導要領家庭」に示された指定題材の教科書での取り扱いについて、指導の立場をふまえ、言及した。調理例等から、調理実習を実施する際には、調理手順の示されていない調理についての理解も必要であり、食に関する全体的な理解が必須となることを論述している。</p>
<p>(口頭発表) 1『高等学校家庭科教員の教科内容・指導に関する認識・実態-大学教育との関わりにおいて-』</p>	<p>単著</p>	<p>平成14年 (2002) 6月</p>	<p>日本家庭科教育学会 第45回大会 (お茶の水女子大学) 口頭発表</p>	<p>大学教育における家庭科教員養成課程に必要な内容を追究するため、現職高等学校家庭科教員の認識・実態の現状を明らかにした。「知識・技術」において家庭科教員が指導する際に得意であると考えているのは食生活分野であり、また、得意ではないと考えているのは住生活分野であった。また、習得した機関としては大学の専門科目が多く、消費者教育や高齢者福祉に関するもの</p>

				は、研修や社会教育に期待していることが明らかとなった。 論文全般を担当、佐藤は指導。 近藤清華、佐藤文子 共著。
2『大学における家庭科教員養成の現状と課題 ーシラバス分析からー』	単著	平成 14 年 (2002) 10 月	日本家庭科教育学会 平成 14 年度例会 (聖心女子大学) 口頭発表	大学における家庭科教職免許取得の課程について、教育学部と家政系学部のカリキュラムを分析、検討することによって、現状と問題点を把握した。大学教育において、家族、家庭、生活時間、栄養、被服材料、家族との関わりにおける住空間、環境と住生活、家計の管理に関するものが多く扱われ、「子どもの発達と保育・福祉」、「高齢者の生活と福祉」、「生活文化」に関する内容は、あまり扱われていないことが明らかとなった。 論文全般を担当、佐藤は指導。 近藤清華、佐藤文子 共著。
3『家庭科教員養成の現状と課題を 考える (家庭科教員の実態)』	単著	平成 25 年 (2013 年) 5 月	日本家政学会 第 65 回大会, 家政教育部会, (昭和女子大学) 口頭発表	大学における家庭科教員養成の現状と課題について、全国の高等学校家庭科教員にアンケート調査をした結果を発表した。家庭科における各内容についての出身大学別の教員の得意の程度や、知識・技術の習得機関等について考察している。
4『高等学校家庭科教員の教育内容・指導に関する認識・実態 -2002 年調査との比較から-』	単著	平成 29 年 (2017 年) 12 月 3 日	日本家庭科教育学会 2017 (平成 29) 年度例会 (東京家政大学) 口頭発表	教育現場において求められている家庭科教育の必要不可欠な教育内容や知識・技術を把握することにより、大学における家庭科教員養成カリキュラム構築のための基礎的知見を得ることを目的とした。2002 年に現職高等学校家庭科教員を対象に、家庭科を指導する際に必要とされる能力について調査した。約 10 年経った 2015 年に同様の調査を行った。その結果、「知識・技術」においては得意であると考えている分野は「食生活」であり、得意ではないとした分野は「住生活」であった。このことは、2002 年調査と同様であった。また、知識・技術の習得機関については、2002 年調査に比べ、大学教育に期待していることが明らかとなった。
(その他)				
1『第 11 回アジア地区家政学会 (ARAHE) タイペイ大会記録「インターナショナルマーケット」』	単著	平成 13 年 (2001) 12 月	日本家政学会誌 52 巻 12 号 報告	第 11 回アジア地区家政学会 (ARAHE) タイペイ大会におけるインターナショナルマーケットの様子を報告したもの。
2『第 20 回国際家政学会 (IFHE) 京都大会記録「一般研究発表 (口頭発表)」』	単著	平成 17 年 (2005) 1 月	日本家庭科教育学会誌 47 巻 4 号 報告	第 20 回国際家政学会 (IFHE) 京都大会における一般研究発表 (口頭発表) の報告をしたもの。
3 新刊紹介『僕が家庭科教師になったわけ つまるところの「生きる力」』	単著	平成 28 年 (2016) 5 月	日本家政学会誌 第 67 巻、第 5 号 p61	「僕が家庭科教師になったわけ つまるところの「生きる力」」小平陽一氏の著書の新刊紹介として書評を書いた。

(注) 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。